

企画委員から

今が一番若い

いとう あきひで
伊藤 彰英

●基幹労連 企画調査部部长



年齢を重ねると、時間とお金に余裕ができた悪友たちから、温泉に浸かっておいしいもの食べよう、海外でゴルフしようなど、さまざまな誘いが来るようになるが、私はどれもあまり乗り気にはなれなかった。

そんな中で、ひときわ印象に残った誘いがある。「モンブランを走らない？」

私の趣味はトレイルランで、月に一度は山を走っている。数年前に友人を巻き込んだのだが、彼は私より年上で、少なくともスポーツマンとは言えない人生を歩んできた人物だ。しかもトレイルランは生傷が絶えないほど激しいスポーツなので、誘っておきながら、いつまで続くのかと内心心配していた。

ところが彼は、「冥土の土産だから」を口癖に、私も尻込みするような急登の山岳レースや夜を徹して走るレースに次々と挑戦している。結果はなかなか伴わないようだが、それでもめげずに頑張る姿にはいつも感服していた。

そんな友人から、ついに海外レースの誘いがきた。世界最高峰のレースの一つとして知られる「UTMB（ウルトラトレイル・デュ・モンブラン）」である。20キロから170キロまで、さまざまなカテゴリーが用意されているのであるが、友人は「せつかくなら、山を楽しめる52キロの部に出よう」と。海外レースで制限時間は14時間、還暦を過ぎた私の答えはノーだった。

友人のバイタリティに敬服していると、彼はこんな言葉を返してきた。「新しいことに挑戦するには、今さら遅いことはわかっている。でも、これから先の人生を考えたら、自分にとって間違いなく今が一番若い。後になってやりたくなっても、

その時の条件は今より厳しくなっていて、きっと後悔することになる。昨日の自分より、今日の自分は一日年をとっているし、明日の自分はさらに一日年をとる。だから、まずは挑戦してみるんだよ。」

最近の私はといえば、何か新しいことを始めようと思っても、「もう少し時間に余裕ができてから」「もっと体力がついてから」と理由をつけて先延ばしにしていた。行ったことのない場所を走ることも、興味のある勉強を始めることも、やりたいこととして漠然と思い描いてはいたが、年齢や忙しさを理由にして、なかなか最初の一步を踏み出せずにいた。

ある日、ふと鏡に映った自分の姿を見たとき、友人の言葉を思い出した。いつか始めようと思っていた間にも、時間は確実に過ぎており、年をとっている。思わず私は、友人にUTMBへのエントリー方法を尋ねていた。

とはいえ、UTMBは人気が高く、参加するためにはかなり高い倍率の抽選を勝ち抜かなければならない。しかも、抽選権を得るためには、指定されたレースを完走し、ポイントを獲得する必要があるという。まだエントリーできるかさえわからなかったが、それでも私は、さっそく山を走る機会を増やすことにした。

新しいことを始めるのに、「遅すぎる日」はない。むしろ、「始めないまま過ぎてしまう日」のほうがずっともったいないのではないだろうか。

「これからの人生で今が一番若い」。この言葉を胸に、どんなに小さな一歩であっても、今日から踏み出していきたい。